

咲き誇れ秋田

日銀秋田支店長の目

世の中では新型コロナウイルスのオミクロン株の感染拡大が続いている。秋田においても、先月半ばごろから感染者数が急増し、デルタ株流行時と同じように街中から「人出」が減っている。最近では、大手検索サイトが位置情報データを基に、全国各地の繁華街や駅前などの日々の訪問数（入出数）を公表している。

これを見ると、秋田のショッピングセンターなどの訪問数は、年末年始にかけて大きく増加した後、正月明けの3連休あたりから急激に減少し、2月に入っても減少に歯止めがかかっていない。オミクロン株の早期のピークアウトと入出の戻りを願うばかりである。

オミクロン株は、その感染力の強さから、もう一つの「ひと

県内での人手不足

でも減らしている。それは、テレビ番組の出演者が一時、代役ばかりになったように、普段通り働いている人々が陽性者や濃厚接触者になることで出勤できず、急に職場で「人手」が減る事態である。こうした事態に対し、職場を運営する方々は、必要最低限の業務と人員数など、緊急時対応を頭の中で考えたり、その一部を実行したりし

たのではなからうか。入出の減少は、オミクロン株のピークアウトとともに解消する時は来ると思う。ただ、当地の場合、人手に関しては、やや

対策にスピード感を

たのではなからうか。

はなからうか。

この数年の秋田県における労働需給の逼迫である。秋田県の有効求人倍率は、つい数年前まで47都道府県中30番台前後であったが、一昨年夏ごろから急激に順位を上げ、全国トップ10をキープしている。これは統計が始まった1963年以降初めてのことである。

そして、こうした将来を見据えると、人手の確保に向けてスピード感を持って行動を起こす時期にあるともいえる。分かりやすい処方箋は賃金であろうが、「こんなご時世に引き上げるのは」というのが、秋田の多くの経営者の気持ちではなからうか。その気持ちは大変よく分かるが、次のような秋田特有の事情を知るとどうだろうか。

これも数値が確認できる1989年以降で最高である。この背景には、電子デバイス関連などで当地をけん引する企業での求人増が挙げられるが、先行き需要動向などを踏まえると、労働需給の逼迫は今後も持続し、アフターコロナでの経済全体の本格的な回復も加わって、人材の奪い合いが一段と過熱するかもしれない。

彼らは当地ですぐに気付くであろう。秋田県民の能力の高さや粘り強さ、発想力の豊かさに。そして、秋田の経営者の皆さんにお構いなしに、グローバルスタンダードに従い、良い人材を確保するために、自分たちだけ高い賃金を払う可能性がある。



そう考えると、今のうちに賃金を上げて、秋田の人材を囲い込んでおくという戦略もありかもしれない。

（真鍋隆・日本銀行秋田支店長）

〈随時掲載〉